2011-2016年度の遡及入力を振り返って

原（はら）　直実（なおみ）
（メディアセンター本部主任）

1　はじめに

メディアセンターでは，1991年より所蔵する資料の書誌レコードを図書館システム（以下，稼働時期により「KOSMOS I」「KOSMOS II」「KOSMOS III」と称する）[1)] に登録している。新規購入資料（以下「カレント分」とする）は日常の業務で登録するが，KOSMOS I稼働以前に購入した資料についても，遡って登録（以下「遡及入力」とする）を行っている。

メディアセンターで行う遡及入力では，カード目録や資料そのものから情報を得，外部書誌ユーティリティから該当する書誌を同定し，KOSMOSに取り込む。ここで問題となるのが，明治より前に出版された日本語資料（以下「和装本」とする）や，中国語・朝鮮語資料（以下「中・朝資料」とする）やキリル文字・アラビア文字などのようなラテン文字で書かれた資料以外のもの（以下「特殊言語資料」とする）である。

和装本は，書誌レコードを作成するための情報を，資料のどの部分から得るかという点が現在出版されている資料と異なる。そのため，和装本を扱うための知識を必要とし，書誌作成のためのマニュアルも別途作成しなければならない。よって遡及入力の優先順位を下げざるを得なかった。

特殊言語資料は，KOSMOS IIまでは簡体字やハングルなどを扱うことができなかったため，書誌レコード登録をしていなかった。またその言語を理解できるスタッフが限られており，遡及入力にかけられる人的な余裕がなかったために，優先度は高いながらもなかなか着手することができなかった。

2　特殊言語資料の書誌作成

遡及入力に着手できずにいた特殊言語資料だが，1997年に，カード目録の画像とローマ字化した検索語を登録した簡易なデータベース（名称：中国・朝鮮・アラビア・ロシア語資料目録，以下「中（ちゅう）から」とする）を作成し，検索を可能とした。しかしPCでの検索は可能になったものの，KOSMOSとは別のデータベースのために利用者にとって使い勝手がよいとは言えなかった。

「中から」作成以後の特殊言語資料の書誌作成状況は，言語によりバラバラな状態であった。

キリル文字資料は，1995年よりカレント分はKOSMOS Iへキリル文字＋ローマ字化した形で書誌レコード登録を始めている。「中から」にはカード目録のあるもののみ登録した。

アラビア文字資料は，アラビア語のわかる臨時職員がカード目録を作成し，それを引き続き「中から」に登録していた。2003年以降は，Microsoft Wordで書誌を作成し，KOSMOS IIへはローマ字化した情報のみを入力している。カレント分だけではなく，「中から」登録分も含めて書誌を作成したので，遡及入力はほぼ終了した。KOSMOS IIIではアラビア文字も入力可能であり，今後はローマ字化した情報のみではなく，アラビア文字＋ローマ字化の形での書誌を入力するべく検討中である。

中・朝資料は，外部業者にカード目録とローマ字化した検索語の作成を依頼し，それを「中から」に登録していた。2001年からは「中から」の後継システムである「中から」IIの稼働準備に入り，カード目録画像ではなくOCLCから取得した書誌レコードを登録することとなった。KOSMOS IIIへの移行後は，直接OCLCから書誌を取得・修正している。また，「中から」IIで作成した書誌レコードもKOSMOS IIIへ移行されている。

いずれもカレント分はKOSMOS IIIへ書誌を入力しているが，「中から」に登録したカード目録画像しかない時代の資料の遡及入力をどうするかということは，変わらず懸念材料であった。

3　2011年度-2016年度の遡及入力

2010年３月にKOSMOS IIからKOSMOS III[1)] へシステム移行が行われた。この移行前後は，移行準備や移行後のデータ改修のため遡及入力を１年ほど

中断していたが，未遡及資料の多い三田メディアセンター（以下「三田」とする）からの要望もあり，システム移行の影響が落ち着いてきた2010年10月より再開した。

遡及入力を再開するにあたって，三田とメディアセンター本部（以下「本部」とする）とで打ち合わせを行った際，カレント分を処理するラインで中・朝資料の遡及を進めることが難しいのであれば，別の処理ラインを作るのはどうかという案がでた。そこで，本学の間接経費を獲得し６年間のプロジェクトで遡及を進めることになった。その期間に行った遡及入力についてまとめる。（表１，表２参照）

(1) 日本語・ラテン文字・キリル文字資料

これらの資料はカレント分の書誌作成と並行して，本部目録担当専任職員・嘱託職員・委託スタッフで資料の内容により分担して作業を行った。

2011年度はKOSMOS IIIへの移行から生じた書誌データの不具合の改修作業を主に進めたため，遡及入力は三田文学部の資料207冊のみにとどまった。2012年度からは遡及入力にも注力し，６年間で三田所蔵分63,627冊，日吉メディアセンター（以下「日吉」とする）所蔵分3,861冊，その他のメディアセンター所蔵分415冊を処理した。

2013-2014年度には，スタッフ１名を増員して理工学部数理科学科図書室（以下「数理図書室」とする）の遡及入力21,104冊も並行して作業した。

数理図書室の遡及を行っている間に，白楽サテライトライブラリー（以下「白楽」とする）の閉鎖および山中資料センター２号棟への資料移動が決まった。白楽の資料は遡及済みと言われていたが，三田所蔵の個人文庫約20,000冊が未遡及で残っていた。書誌・所蔵情報ともKOSMOS IIIに未登録のままで書架に並んでいたため，所蔵レコードは急遽一括作成し，書誌は本部が契約している委託会社の契約社員２名が現地で遡及入力を行なうことになった。当初は2014年７月から2015年９月までを予定していたが，予定より早く2015年７月に現地での作業を終えることができた。最終的には三田個人文庫以外の未遡及資料も含め，23,653冊の処理を行った。

2015年10月からは，「中から」稼働時にカード目録画像を登録し，KOSMOS Ⅰ～IIIのいずれにも書誌を入力していなかった三田・日吉所蔵のキリル文字資料の遡及入力も進めており，現在も継続中である。

結果として，2011-2016年度の６年間で，合わせて112,660冊の遡及入力を行なった。

表１　日本語・ラテン文字・キリル文字資料[2)]

	三田					日吉	その他	数理図書室	白楽	合計
	図書館	法学部	文学部	個人文庫	計					
2011年度			207		207					207
2012年度	793	428	14,554	2,494	18,269					18,269
2013年度	473	604	3,043	13,295	17,415			12,241		29,656
2014年度	22		1,265	10,789	12,076		221	8,863	15,710	36,870
2015年度	4,398			5,556	9,954	75	24		7,943	17,996
2016年度	4,607			1,099	5,706	3,786	170			9,662
合計	10,293	1,032	19,069	33,233	63,627	3,861	415	21,104	23,653	112,660

表２　中国語・朝鮮語資料，漢籍

	中国語・朝鮮語資料									漢籍	合計
	三田					日吉	湘南藤沢	白楽	計		
	図書館	法学部	文学部	経済学部	個人文庫						
2011年度	1,879	7,804							9,683		9,683
2012年度	6,769	5,287	1,202						13,258		13,258
2013年度	1,515		16,098						17,613		17,613
2014年度			14,758		21				14,779	5,976	20,755
2015年度	3,899		4,180	248	132	225	782	3,330	12,796	11,568	24,364
2016年度	683		1,487		1,976	13,247	352		17,745	8,080	25,825
合計	14,745	13,091	37,725	248	2,129	13,472	1,134	3,330	85,874	25,624	111,498

(2) 中国語・朝鮮語資料

「中から」IIのサーバを維持している間に間接経費による遡及入力を進めることとなった。2011年度からの6年計画で，年間15,000冊，計90,000冊の処理を見込んだ。この業務はカレント分とは別の会社に作業を委託した。

仕様書の作成など事前準備のため，遡及入力の開始は2011年4月ではなく5月下旬となった。遡及対象のうち三田の所蔵する資料が一番多いため，まずは三田の大部なセットものから着手した。

初年度は5月下旬開始であり，かつ作業にも慣れていなかったため，予定より少ない9,683冊の処理に留まった。2012年度からは年々処理数も増え，2017年3月8日までに計85,874冊の遡及入力を行なった。

この中には，日吉所蔵の13,472冊，湘南藤沢メディアセンター所蔵の1,134冊，白楽に配架されていた3,330冊を含んでいる。

(3) 漢籍

中・朝資料の遡及を進める中で，三田の個人文庫に和装本（その多くは漢籍）が含まれていることがわかった。

初めは和装本を抜き出し，目録担当専任・嘱託職員で書誌作成を行っていたが，日常業務との兼ね合いで処理が滞るようになったため，和装本のうち漢籍については中・朝資料の遡及入力を委託している会社に追加で委託することとした。

費用は2014年度には間接経費を追加申請，2015-2016年度は和装本遡及も含めて遡及入力するということで増額して申請した。

遡及入力開始は2014年10月で，個人文庫に含まれている漢籍に着手した。個人文庫の漢籍の処理に続き，2016年11月-2017年3月には文学部国文学専攻の漢籍の遡及入力も行い，2年6か月で25,624冊の処理をすることができた。

4　6年間を振り返って

2011-2016年度の6年間の遡及で，図書は合計224,158冊の遡及入力をすることができた。

特殊言語資料のうち，中・朝資料を完全に終了させることはできず，2017年3月末の時点で3,000冊ほどを残してしまったが，予定していた90,000冊を大きく上回る成果が出せた。

また，キリル文字資料も約300冊を残してはいるものの，「中から」稼働時に登録したカード目録画像しかない資料の書誌作成が大きく進んだ。

数理図書室・白楽の遡及はいずれも2年間の期限付きで，それぞれの処理期間が重なる時期もあったが，予定通りに終わらせることができた。

反省点としては，資料の内容によって担当者が異なり，処理ラインが複数稼働することによって，進捗管理が複雑になってしまったことがあげられる。本部目録担当の専任職員のうちの数名しか進捗状況を把握できず，情報共有が上手くできなかった。

また，漢籍の遡及を委託した際の作業手順確認が十分ではなかった点があった。日本人の典拠レコードと中国人・朝鮮人の典拠レコードの違いについての説明が不足していたため，著者標目のタグに入力されるべきサブフィールドが欠けるという不備が発生してしまった。検索など書誌を利用することに影響する不備ではないが，メディアセンターでの書誌作成のルールからは外れている。特殊言語資料の処理は，カレント分ではその言語ごとの担当者に任せているため，説明を必要とする可能性に思い至ることができなかったことが反省点として挙げられると思う。

そして，処理速度を上げるために書誌作成の手順の一部を簡略化したものがある。中・朝資料については，KOSMOS III内に典拠レコードがなかった場合には，新規に典拠レコードを作成せず典拠リンクを形成しなかった。白楽の遡及においては，書誌作成後の点検作業を行わなかった。いずれも処理速度を上げ，一定期間内に極力多くの遡及入力を進めるために必要な簡略化であったが，書誌の品質を保つ上ではマイナスであったと思う。

5　今後の遡及

今後はカレント分・KOSMOS IIIの後継システムへの移行のためのデータ改修などと並行して，遡及入力を進める必要がある。これまでのような速度での作業進捗は望めないことが予想されるため，優先順位を決めて処理をしていきたいと考えている。

まずは特殊言語資料と個人文庫に含まれている日本語資料，および文学部国文学専攻所蔵の資料のうち，2016年度中に終了できなかったものの処理を進めている。また，保留となっていた数理図書室の購

読を中止した雑誌500タイトルの書誌作成も2017年７月より開始した。

その他に信濃町メディアセンターで所蔵する明治より前に刊行された医学書，三田の準貴重書については，リストを作成し一括登録をする予定である。

6　最後に

毎年，年度末に本部システム担当でKOSMOS IIIの所蔵レコードとそれにリンクする書誌レコードの一部を抽出しているので，そこから未遡及資料の数を確認している。[3)]

2016年度末の抽出データの確認をしたところ，図書については未遡及資料と思われるものは20,000件強であった。2014年度末には約75,000件だったので，着実に減ってきている。

ただし，加除式資料など，所蔵レコードもKOSMOS IIIに作成されていない未遡及資料が見つかる可能性があるため，実際には20,000件では終わらないかもしれない。だが，遡及入力が終わる日が来るのかどうか見当もつかなかった６年前に比べれば，遠くないうちに終わる時がくるかもしれないという希望が見えてきたように思う。

注

1）1991年12月-1998年９月の図書館システムはKOSMOS I，1998年12月-2010年３月の図書館システムはKOSMOS II，2010年３月-現在の図書館システムはKOSMOS IIIと呼んでいる。

2）日本語資料には，漢籍を除く和装本を含む

3）未遡及資料はタイトルを入力するタグ245にBook IDが入力されているため，10桁または11桁の数字のみがタグ245に入っているレコードの数を未遡及資料としている。